IMAJ ニュース NO.48

(社)国際MRA日本協会機関誌

発行年月日 昭和62年4月10日
発行所 (社)国際MRA日本協会
発行者 高瀬正二
頒価 1部200円

INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN 〒113 東京都文京区千駄木4-13-4 TEL. 03-821-3737(代)

インドMRA国際会議レポート

●開会式でろうそくに灯をともすブータン外相

昨年12月28日から今年1月3日まで、インドのMRAセンター、アジアプラトーで『分裂した世界におけるSAARC（サーク、別欄参照）の役割』をメインテーマに、第7回「開発のための対話」会議が開催された。世界人口の$\frac{1}{5}$を占め、様々な悲劇的紛争の歴史とその開発にかける悲願によって象徴される南アジア地域。ここで真の開発をすすめるためには、政府間だけではなく、個人間の協力と信頼関係の確立が必要とされるだろう。しかしながら、その開発に必要な予算が地域に存在する政治的、軍事的緊張のために、しばしば軍事費として使われてしまっているのも現実である。今回、SAARCの創設を記念し、そのかけ橋づくりの場として、又、互いに個人として出会い対話する場としてアジアプラトーが提供された。参加者は19ケ国から250名。うち日本からは5名が参加した。

第7回「開発のための対話」アジアプラトーで開催される

テーマ――分裂した世界におけるSAARCの役割

SAARCとは

――SAARC・南アジア地域協力連合――
(South Asia Association For Regional Co-operation)

バングラデシュ政府の提唱で、1985年（昭和60年）ダッカで調印。
〈加盟国〉バングラデシュ、ブータン、インド、モルジブ、ネパール、パキスタン、スリランカの7ケ国。
〈目的〉加盟国が一致団結して、貧困、文盲、栄養失調、病気といった同地域共通の問題解決に取り組む。

インドMRA国際会議レポート 1p
インドで考えたこと／高橋久美 4p
ニュージーランドMRA国際会議レポート 6p
MRA文化講演会「21世紀を幸せに生きるための基本」／山崎房一 8p
アフリカ・ザンビアで過した2年間（その2）／寒河江 亮 10p
九州MRA協力会第16回訪韓研修レポート 13p

共通のゴールをめざしているサークとMRA

朝日がのぼり、それまで白い霧につつまれていた谷が眼前にその雄大な姿を現わした。

光が、オレンジ色の火炎樹と赤紫のブーゲンビリアの花を鮮やかに染め上げる。遠くに見えるアジアプラトーの農場では、インドの赤茶けた土の上でトウモロコシが力強く育っている。標高一三〇〇メートルのこの土地は、二〇年前にMRAセンター建設用地として選ばれた当時、木が僅か二本しかない荒涼とした土地だったという。アジアプラトーでは、意志と努力と技術が一つになった時、これほどの開発と変化が成されるという事実を、訪れるすべての人が目の当たりにする。

開会式へは、南アジア諸国の代表がろうそくを手にして臨み、各国の国家が斉唱された。基調講演を行なったブータンの外務大臣は、過去十六年間にわたる外務大臣としての体験をふりかえり次のように述べた。「人類の将来に大きな影響を及ぼす決定を下している様々な国際的機関で、道徳的価値が失われつつあるのは憂うべきことです。人間性が変わらぬうちは国連もSAARCもその理想を達成することはできません。MRAの目的は、人の心に変革をもたらし、一人一人の生き方から腐敗を追放することだと聞いています。SAARCとMRAは同じゴールをめざしているといえるでしょう。」

大臣には外務省の役人三名が同行した。

バングラデシュの悲劇

SAARCの首唱国バングラデシュからは、ニューデリーの大使館に勤務するムシム・アリ氏を初め、作家、学者、ソーシャルワーカーなど八名が参加した。一行は実に四日がかりでアジアプラトーに到着した。アリ氏は、一九四七年と七一年の二度にわたって多数の犠牲者と難民を出した分離独立戦争について語ったのち、こうつけ加えた。「しかし、南アジアの住民は、過去にとらわれて生きるのをやめ、新しい歴史を築いていかなければなりません。今こそ、一致協力して貧困、飢餓、文盲、栄養失調などの共通の敵に立ちむかうべきです。」

このアジアプラトーの六日間では、新しい歴史を拓いていくには、古い傷の癒やしが必要であるということを教えられた。バングラデシュ代表の中には、一九七一年のパキスタンからの独立戦争の際に、解放軍で戦ったり身内を失った人も多く、そのつらい思い出のためか、初めの数日間というものは、両国からの代表たちは互いの目すら決して合わせようとしなかった。しかし、和解や許しを実際に経験した人々の話を聞くうちに、心の傷が少しずつ癒やされていったという。

或る国際機関でコンサルタントをつとめるパキスタン人の男性が、バングラデシュ代表団に対し、「あの狂乱状態の中で起きてしまった出来事を、忘れて下さいとは言いません。せめて許していただきたいのです」と謝罪した。この男性自身、印パ分割の際、全財産を失い、一時難民になっている。つづいて発言した若いパキスタンの女性も同様に許しを請い、その姿にうたれたダッカの女流作家が立ち上がった。「皆さんありがとう。今まで私は心に深い傷を負ったまま生きてきました。しかしこれからは、許し、そして忘れる努力をしましょう。アジアプラトーは貴重な経験を授けてくれました。これからは『心に響く声』に聞き従い、囲りの人々の傷を癒やせるよう力を尽くすつもりです。」

シーク教徒は本当にテロリスト?

シーク教徒のサーニー夫人は、「パンジャブ州のゴールデンテンプルが破壊されたことは、私達にとって大変な苦痛でした。しかし、後に起きたガンジー首相の暗殺を正当化するシーク教徒はほとんどいません。」と述べた。「この宗教は、武装していない人間、それも女性を攻撃することを厳に禁じています。首相を暗殺したシークの若者達は、自らの宗教を冒瀆し、同時に首相の命を守る立場を放棄したのです。祖国インドのために私達が多く犠牲を払ってきたの

●ブータン代表(左)と談笑するダライラマから送られたチベット人代表

にもかかわらず、今やシーク教はテロリズムの代名詞のようになってしまいました」。

ガンジー首相暗殺直後に、ヒンズー教徒がシーク教徒に対して無差別な報復を行なった。あるヒンズー教徒の女性が、当時の混乱の中で命がけでシーク教徒をかばったという話を聞いて心を動かされたサーニー夫人は、参加者全員にこう訴えた。「母として、また孫を持つ身として一言いわせて下さい。子供たちが、憎悪や敵意といった遺産を受けつがずにすむように、ともに平和と調和と発展のために働きましょう」。

シンハリとタミールの和解のために

スリランカからは六名が参加した。うち一名は、国を脱出してインド内で少数派タミル人解放運動を支援する男性だった。最初に、分裂抗争を続けるスリランカの状況説明がおこなわれ、率直な発言が続いたが、言葉の端はしで感情がむき出しになり、この問題の根の深さが感じとられた。

多数派シンハリ人のロヒニ・デメール女史が、これまでのシンハリ人による暴力行為や抑圧に対して謝罪をし、双方の対話を進めるために、どのような背景をもつ人でも参加できるセ●ーを持ち続けたいとの決意を述べた。続いて、教育者でもあるカトリックのシスターは次のように述べた。「自業自得というものです。私たちが憎しみや敵意という種をまき続けた結果、今、暴力という名の稲を刈り取る破目になったのです。まず、タミル人の若者達の言い分に、苦痛に、そして彼らが必要としていることに耳を傾けることから始めなければ」。これに関しては南アジア地域以外からの参加者の意見にも貴重なものがあった。「うまくやれないから別れる。気に入らないから境界線を引く。これが最良の策でないことは、アイルランドの例など、私たちの歴史が示しています」。こう警告したのはイギリス人だった。

最後に、元国会議員のシンハリの女性が立ちあがり、タミル人活動家と話ができる機会に感謝し、「彼が一日も早く祖国に戻れるよう」最大限の努力をすることを誓った。

インドでは現在もカースト制度が大きな社会問題の一つとして残っている。この会議に参加したハリジャン（不可触賤民）と呼ばれる人達は次のように発表した。

バブラル―私はいつも囲りと争っては問題をひき起こす人間でした。大勢いた友人もしだいに離れてゆき、ついには敵にまわしてしまいました。ところが、私より先にMRAに出会っていた友に何度も●られて初めて心の声を聞いた時、彼らに謝まって許しを請うという考えが浮かんだのです。下手に切り出せばかえって攻撃されるのでは……そんな恐れをふりきって実行してみると、彼らは私を許しただけでなく、再び友として受け容れてくれるようになりました。

私は、長年にわたって踏みにじられ苦しみぬいてきた階級の出身です。同じ井戸水を汲むことも道を歩くことも許されず、夜明け前から清掃の仕事を始めねばならない状況は、今もあまり変っていません。残酷な仕打ちを受けてきた私たちの怒りを察していただけるでしょうか。しかし、今までの分を復讐に訴えても解決するものでもないでしょう。同じめに会わせてやるでは自分もあの人間たちとなんら変わりがないことになる。この世界をつくったのが神ならば、私たちも神の望む生き方――自分を苦しめた人間をも受け容れ愛していくこと――を学ばなければなりません。

ランジット・シン――デリーでは、ハリジャン・コロニーと呼ばれる地域に住んでいます。マハトマ・ガンジーも生前よく訪れた場所で、世界中からさまざまな団体や宗教の指導者、政治家たちがひきもきらず訪れます。ここの住民の仕事といえば、道路と家々の清掃の仕事です。これまで無数の人々がこの現実を変えようと努力してきました。初めてMRAがきた時、私達が学んだのは「心の声」に耳を傾けることでした。そして、今の状況を改善するだけにとどまらず、私たちにも、社会や国のために貢献することができるんだというビジョンを与えてくれました。その上、多くの人種や国籍からなるMRAのグループを見て、それまで私たちを搾取してきた張本人として憎み続けてきたヒンズー教徒とも、うまくやっていけるかも知れないという希望がでてきたのです。酒

●会議で発言するランジット・シン氏（左）

に溺れ、妻に暴力をふるい、子供達を空腹のまま放っておいた私には親戚すら寄りつかない状況でしたが、四つの絶対標準（正直、純潔、無私、愛）に基づいて生まれ変わることを決心しました。不正な金を受け取ることは一切止め、MRAのチームと各家庭をまわり、私達ハリジャンの尊厳と融和のために働く毎日です。

傷には治療が必要

チベットのダライ・ラマ猊下は、今回もチベット人学校の校長を含む二人の公式代表を送られた。失われた祖国について、また正義に到達するための非暴力的アプローチについても多くが語られた。

バングラデシュ人とパキスタン人がともに壇上に立って話しをするのを見たインド留学中のナイジェリア人の学生がこう言った。「ビアフラが引き起こしたいまだ生々しい傷を忘れたふりをしている人もいます。しかし、ここに来て、傷は放っておいては癒やされない。治療が必要だということに気付いたのです」。

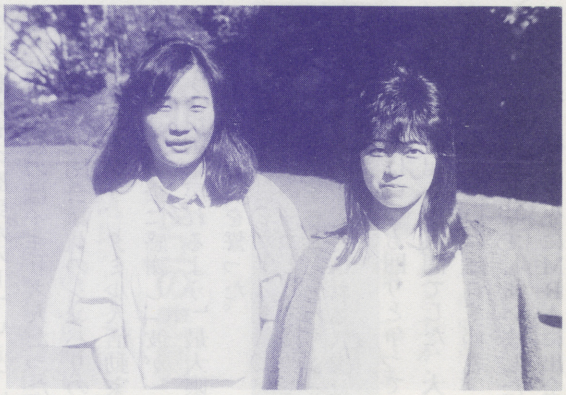
傷を癒やし、和解をすすめる――これこそが分裂した世界におけるSAARCの役割であり、私達一人一人に与えられたチャレンジなのである。

（ニューワールドニュースより抄訳）

MRA国際会議に参加して

インドで考えたこと

高橋久美



●筆者（右）と埼玉から会議に参加した北口尚子さん

観光旅行では体験できないインドを見る

今回、姉に連れられてインドを訪れることができた。姉の場合は、もちろんMRAの仕事のためなのであるが、今回は私がくっついていくことになったため、申し訳ないことに私の通訳兼ガイドまでやらせてしまった。

正直言って、私のこのインドへの旅は、MRAの会議への参加だけを目的としたものではなかった。あこがれていたインドに実際に行って触れてみること、そして少し自分を見つめて四月からの仕事に対する心構えを持つこと――くらいができればいいな、と思っての出発であった。

ところが、姉とずっと同一行動をとっていたのだから当然のことなのではあるが、一ヶ月の間、見事にMRAのお世話になりっぱなしであった。考えてみると、泊めていただいたところも、知り合った友人も、すべてMRAを通じてのものであったような気がする。そうなると、旅としては少々甘いし、迫力不足であったといえるのかもしれない。しかし、その優しい友人たちの力があったからこそ、私なども元気に、インドを好きになったまま帰ってくることができたのだと思う。ただの観光でホテルですごすだけの旅であったら、またずいぶん感じ方が違っていたであろう。

というわけで、まさにMRAだらけの一ヶ月だったのだが、私にとって学ぶべき点は山ほどあった。パンチガーニでの半月は、なんでここまで来てこんなに忙しいんだろう、と思わず考えてしまうほどあわただしかったのだが、振り返ってみると実に充実していて、勉強になったと思う。毎日のサービスチームの仕事、コーラスの練習、そしてミーティングと朝から晩までくるくる動いていたような気がするが、そんななかでたくさんの友だちをつくることができた。

世界家族を思わせる雰囲気

この一ヶ月の体験で、私が特に考えさせられた二点を挙げてみたいと思う。

まず一つ目は、世界の平和についてである。ずいぶん大げさな言い方かもしれないが、私なりに感じたことを書いてみたい。パンチガーニに

は、世界中の国からさまざまな人たちが集まっていたのだが、不思議なほどあたたかい雰囲気がそこにあった。顔の色も違えば、言葉も宗教も違うというのに、一緒にいるうちにみんな家族のような気さえしてきてしまった。言葉を交わさなくても、歩いていて出会えばにっこりとほほえみ合う。そんなことが嬉しくてたまらなかった。そして、こんな嬉しさこそが、実はものすごく大切なことなのではないかと思ってしまったのである。

もちろん、そこにいる人々も、一人一人それぞれの問題を抱えていた。自分の国についての悩みなど、それらは決して簡単なことではないと思う。私は、MRAの考えを実践している人たちなら、もうすべて達観してしまって穏やかに生きているのではないか、などと思ってしまっていたのだけれど、会議などを見ていると結構衝突もしていた。それぞれが持つ問題の複雑さは言うまでもないことなわけである。

けれども、私自身まだ「真の平和」がどんなものかさえつかみきれてはいないけれど、あのあたたかさ、嬉しさを経験してしまった以上、何とかしていかなければならないような気がする。平和を考えていくうえで、大切なヒントを与えてくれたように思うのだ。

私の人生の大切な転機

考えるべき第二点とは、いわずもがなの語学力不足である。本当に、たかが英語程度を操ることができないばかりに、どれだけ損をした気がしたことか。インドの人は英語のほかヒンズー語やマラーティー語など、平気で二つ三つ使いこなす人が多いというのに、何でここまで私は無力な思いをしなければならないのか。今までの自分の努力と意欲不足を多いに反省させられた。別に私は、英語だけを礼讃しているわけではない。言葉だけが、コミュニケーションの唯一の手段であるとも思いはしない。実際ずうずうしい私は、見事な英単語会話と〝人間同士わかり合えないはずはない！〟と思い込んでの動作表現、しまいには思わず日本語で話しかけてしまう、といった大胆さで、結構たくさんの友達をつくってきた。けれども、もっともっと話をしたかったし、いろいろなことについて論じ合ったりもしてみたかった。この思いを忘れずに、なんとか早く実現できるよう、がんばりたいと思う。

そんなわけで、この旅は私の大切な一つの転機になったような気がしている。インドの地からも教えられることは限りなかった。それらはまだ、私の頭の中で混乱しているけれど、いつかきちんと自分のものにできるようにしていきたい。

お世話になった人々に深く感謝するとともに、この旅で得られたものを、私の今後の生き方に少しでも生かせるようでありたいと、今、考えている。

（中学校教員）

●各国代表の発言を熱心にメモする参加者達

御案内

㈳国際MRA日本協会は、倫理性と調和をもった世界作りのため、世界のMRAチームとの連繋のもと諸般の活動を行っております。毎年開催される国際MRA会議もその一環であり相互理解と信頼の絆は年々強まっています。他にも人材育成のための研修生の海外派遣、研究会、講演会の開催等々、日本人の『心の開国』を推し進めるために活動しています。ぜひこの活動にお加わり下さい。御入会下さった方にはニュース初め各種会合の御案内をさせて頂きます。

一、会費

㈠ 正会員

個人　年額　三〇〇〇円

法人　年額　五〇〇〇〇円

㈡ 賛助会員

個人　一〇〇〇円以上

法人　五〇〇〇〇円以上

（共に年額）

一、銀行振込先

富士銀行動坂支店

（普）九九一八九二

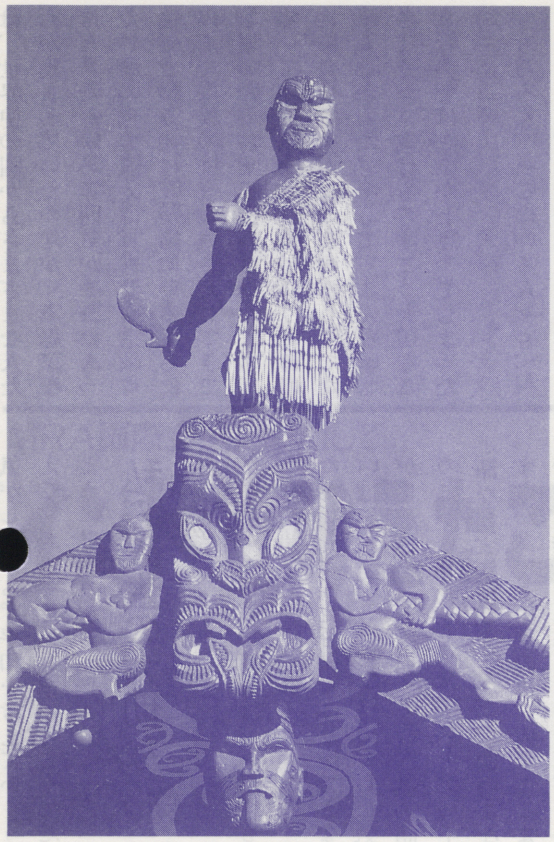
住友銀行上野支店

（普）二五四九三七

一、郵便振替口座

東京八―三八二八九

口座名　社団法人国際MRA日本協会



太平洋州は新しい世界の希望となりうるか？

―その人的資源の活用をめざして―

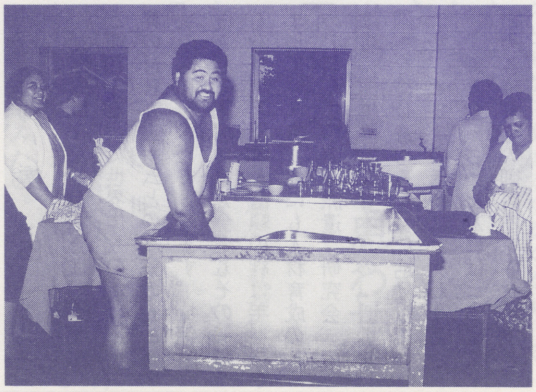
ニュージーランドMRA国際会議レポート

マオリとパケハの不幸な歴史に和解の光を○○○○○

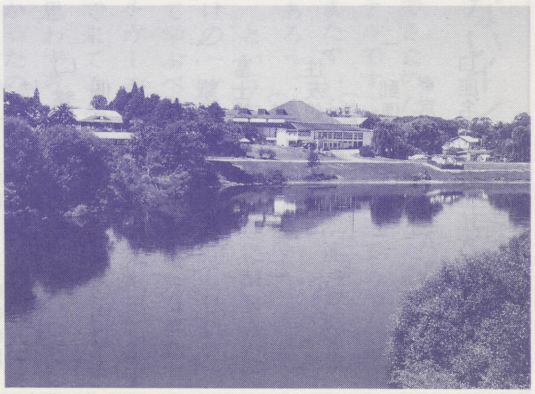
今年の二月五日から十日にかけて、オセアニア地域本年度初のMRA国際会議が「太平洋州は新しい世界の希望となりうるか？」をメインテーマにニュージーランドで開かれた。同国最大の都市オークランドから南へ百キロほど下ったところに、ナラワヒヤという小さな町がある。会場となったのは、この町にある先住民マオリ族の伝統的集会場（マラエ）で、タイヌイ族の女王、クイーン・テ・アタイランギカーフ所有のトウランガワエワエ・マラエである。この国を訪れる外国の国王や女王、大統領、大使、高官等はまずこのマラエに招かれることになっていて、ここで会議を開けるのは大変名誉なことだという。実際、会議最終日の二月十日には、デンマークのマルグレーテ二世女王がこのマラエに招かれ歓待を受けられた。

◇　◇　◇

会議には日本を含む十四ヶ国より二百名ほどが参加した。地元のマオリ族はもとよりオーストラリアからは原住民のアボリジニー、カナダからはカナダインディアンも参加し、互いの地域社会での問題解決の



●会議中の食事は全てマオリの人々が作ってくれた



●会議の会場となったマラエの全景

体験等が話し合われた。さらにフイジー、西サモア、キリバスなどからも代表が参加したが、最近の倉成外相の南太平洋諸国歴訪に見られるように、同地域への関心や政治的認識が高まっている折でもあり、まことにタイムリーな会議だったといえよう。はるかイギリス、フランス、フィンランド、アメリカなどからの参加もあり、同地域への世界的関心の高まりをうかがわせた。

◇　◇　◇

会議二日目の二月六日は、一八四〇年にマオリ族のしゅう長らと英国政府代表との間に取り交わされたワイタンギ条約（英国の直轄植民地となった）の調印記念日であった。しかし、この条約の法的正当性への疑問を持つ多くのマオリの若者達は、今だにこの日を祝日として祝うことに反対している事実も教えられた。この国の先住民であるマオリ族と、後からヨーロッパからやってきたパケハ（白人）との不幸な過去の歴史が現在の両者の対立の背景となっている。そこに和解という希望の光をいかにして見い出し、太平洋州が新しい世界のためにどのように貢献できるのか、さまざまな方策が真剣に話し合われた。

豪ビクトリア州政府アボリジニー問題特別顧問を務めるレジ・ブロー氏のスピーチをご紹介したい。

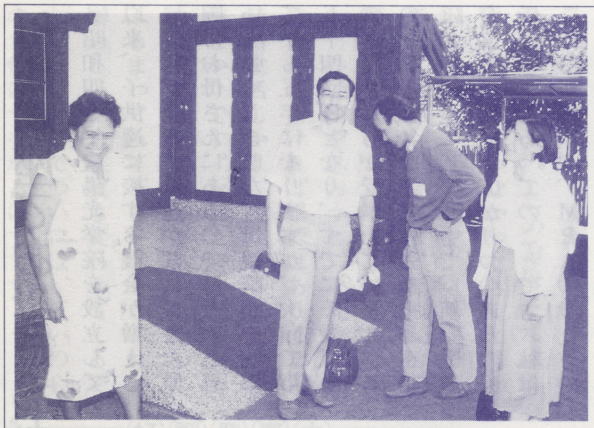
十年前に、初めてMRAの会議に参加しました。その結果、私のそれまでのかたくなな態度が改まり、それぞれの分野で問題解決のために努力している人々の体験談に耳を傾けられるようになりました。又、インドのMRA会議に参加した時は、私達アボリジニー（オーストラリアの原住民）が白人にどれ程ひどく扱われているかを訴えるつもりでいましたが、インドの目を覆いたくなるような貧困と窮状をまのあたりにして、一言も発することができなくなりました。人間の苦悩という点でとても比べものにならなかったのです。

アボリジニーは、近代文明を最後まで拒み続けた民族です。実際、近代化は私達に破滅をもたらしました。一九八八年は、オーストラリアに最初の移民団が上陸してから二百年目にあたります。しかし、私達アボリジニーは、土地所有権、雇用、住宅問題等について依然としてその不公平を訴え続けているというのが現状です。しかし、今の私には政府や野党、そして教会や地域社会の指導者とも対話を続けていく覚悟できています。

私も人間ですから、仕事の上で交渉相手を憎んだり感情的になったりもしましたが、ここ数年は心の安らぎを見い出せるようになりました。私の精神を高めてくれる人々との出会いを通じて、実際の仕事面で様々な人間と根気強く対話を重ねる心の準備ができてきました。アボリジニーにとっても最善の方法を模索していきたいと思っています。

マオリ族女王のメッセージ

Dame Te Atairangi Kaahu



●フランスからの代表と談笑する女王（左）

ここに皆様をお迎えして、MRAの会議が開催されますことを、非常に光栄に思います。MRAのことは、創始者のブックマン博士が世界キャンペーンの一環としてニュージーランドを訪問された頃から存じております。私はまだ子供でしたが、当時のことはよく覚えています。その斬新なアイデアに、わがマオリ族の多くの者が共鳴したものです。皆様が当地での滞在を満喫され、会議が実り多いものになることを心よりお祈りいたします。

21世紀を幸せに生きるための基本

ガミガミ言わないでお母さん！

強い子伸びる子の育て方（MRA文化講演会）

山崎房一
（新家庭教育協会理事長）

（やまざき・ふさいち）昭和元年、山口県に生まれる。昭和24年、MRAに参加、ロンドンに学ぶ。昭和47年、陽光学院創立。昭和57年、母親心理学訓練講座開講。同年、新家庭教育協会創立、理事長。「母親心理学講座」はNHKラジオを初め、テレビ朝日、TV東京、山口放送、西日本テレビ、NHKなどで全国的に紹介された。著書に『お母さん、こうすればわが子はみるみる変わる』『子らに残したい言葉』共に（山手書房）、『さびしい子どもは伸びない』『元気な子はこうして育つ』共に（評伝社）などがある。

母親講座でお母さんがかわった！

昭和四七年に陽光学院を設立して以来、子供達に接する機会が増えるにつれ、今の子供達が荒れてきた原因はお母さんにあるのではという思いを強くしました。母親講座を始めてから五年になりますが、次回で第五十四回目となり、すでに千人以上のお母さん方が受講しています。この分野の著名な先生方の講座が三回ほどで終ってしまう中で、新家庭教育協会の運動が広がりつつあるのも、皆様の支えあってのことです。私はこの母親講座で、MRAの考え方の実践、応用をしているつもりです。

人間の心を変えるのは難かしい。しかし、態度や言葉遣いをまず変えてみると、心もそれにつれて変わっていくものです。また「愛」は名詞でなく動詞であるというのが私の意見です。たとえ心にあっても、実際の言動に表われなければ愛とはいえません。

人間の心は、変わりやすく不安定です。訓練次第で強くできるものでもありません。弱いからこそ、数々の哲学、宗教、芸術を生み出したのでしょう。私は「以心伝心」ということを信じません。その人にならない限り、自分の心を他に伝えるのは不可能です。「I LOVE YOU」は口で言わねば相手にわかりません。そこで多少の演技が必要になってきます。私は父親講座も二回開いていますが、「今夜のメシはうまいよ」と教わったとうりに一言ほめたら、奥さんが本当に喜んだという報告がありました。ただでさえご主人の帰宅が遅くスレ違いが多いのに、食事にまで文句を言っていたら家庭はギスギスしたものになります。たとえおいしくなくとも、その努力に対してねぎらいの言葉をかけていただきたいのです。私が母親講座を通じてやろうとしているのは"目の見えないボケた"お母さん方をつくることです。子供に手をひかれる母親が理想の姿だと思います。最近のお母さん方の「目」は自分の子供の欠点ばかり拡大鏡を使ったかのようによく見え、「耳」は"忙しいのよ、今はダメ！"の一点ばりですっかり退化してしまっている。そして「口」は、機関銃並の高性能。ひと度この寄生虫「ママ虫」がとりつくと、さまざまな問題をひき起こします。そこで私は次のようなポスターをつくりました。「大好き、お母さん。大きな耳、小さな口、やさしい目。」

自分に百点満点をつける

幸せに生きたいのなら、このままの自分でいいんだとまず納得することです。私はこのことで六十歳になるまで迷いました。小さい頃には両親から、「お前は悪い子だから勉強しなさい、修養しなさい。」と言われつづけ、向上心は常に自己否定のもとに成り立っていました。お釈迦さまも、そのままの自分ではいけないと難行苦行と断食を続けられ死にそうになった時、自分を苦しめても悟れず死ぬだけだと気付き、苦行をやめて小川のほとりで手を洗われました。菩提樹のそばに行こうとした時、少女が乳がゆをくれました。そのかゆを美味しいと思った瞬間に、わが身の精巧さに驚かれたのです。この舌、目、手足、すべて神が、大自然がつくられた。ありのままの自分が美しいのだと。私も六十歳になってやっとこの天の極意がかすかに見えてきました。自分に百点満点をつけましょう。それがスタートです。私は自分を責めるのを止めてからすっかり若がえりました。おのが姿を受け容れて、大きな愛を発見していく。これこそ、人が二十一世紀を生きていくカギ[illegible]。そして「向上心」は、このままの自分でいいと納得した時に、無理せずとも神様が与えて下さるのです。

今一番いいことをしよう

お母さんがガミガミ言わなくとも子供は神様がちゃんと育てて下さいます。大切なのはその邪魔をしないこと。子供の基盤は母親の言動の影響を受けてできあがっていきます。ですから、子供との信頼関係を築くことが不可欠となります。今、問題児が増えていますが、孤独ゆえに警戒心を強めてしまい、その結果、集中できずに不完全燃焼するといったパターンが多いのです。「ボクはお母さんに嫌われている。きっと重荷になっているのに違いない。生まれてこなければよかった」反対に、伸びる子は安心感を持っている。それは親との連帯感があるからです。やる気のない子にいくら精神的な教えや地獄の特訓を押しつけても駄目です。人間は人と人とのつながりで生きているのですから、まず必要なのは支えの言葉なのです。

私が書いた詩を聴いて下さい。

「今」

今、一番いいことをしよう
将来に不安や心配事があっても
将来がやってきたら
その時一番いいことをすればいい
あの時ああすればよかったと思う
ことを止めよう
あの時一番いいと思ってやったの
だから

21世紀を幸せに生きるために

目に見えないことに煩わされてはいけません。先日私は、駅のホームで脳障害をもった子供を背負ったお母さんを見かけました。汗をぬぐうその姿が神々しく見え、思わず手を合わせました。このお母さんにも「この子さえいなかったら」と思う日もあったことでしょう。もし心で思うことも罪ならば、この人は地獄に落ちなければなりません。しかし、心で何を思おうと、それを言動に表わさなければ罪ではありません結婚生活しかり、寝たきり老人の看病しかりです。たとえ憎くとも多少の演技をしてごらんなさい。優しくふるまってみて下さい。そうすれば憎らしい姑の態度も変わってくるでしょう。そしてついには、互いの心の変化につながるはずです。

ここで、二十一世紀を幸せに生きたい人々のために三つの提言をいたします。

一、心に愛があったら、それを言葉や態度に表わすこと。

二、「愛」とは名詞でなく動詞である。

三、「罪」もまた、名詞でなく動詞である。

神様は良い心と悪い心の両方を与えてくれました。これは事実です。しかし、神はどちらの声に従うかの決定権をも与えて下さったのですから、私達の責任になってきます。私達一人一人には、欠点もあれば根性の悪いところもあります。このことを当り前のこととして受けとめましょう。こだわりをなくした上で、心をきれいにしていくことです。

好評発売中

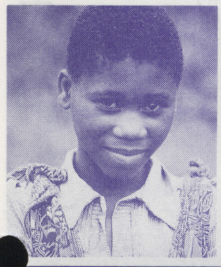
「強い子伸びる子の育て方」

山崎房一 著　定価1,300円

日本教育新聞社

子供の成績が伸びない、無気力でやる気がない、イジメる、イジメられる、登校拒否してしまった……いろいろなケースがある。でも必らず道が開けます。

お母さんは愛の神さま



寒河江　亮

青年海外協力隊員として

アフリカ・ザンビアで過した2年間（その2）

物資豊富な ルサカの青空市場

ルサカは、豊かな緑に恵まれた近代的な街だった。立派な中層ビルも沢山建っているし、メーンストリートのカイロ・ロードには、銀行、スーパー、ブティックなどが軒を並べ日中は大変な活気があふれている。もっとも夜は七時を過ぎると、人通りもバッタリと途絶え、ゴーストタウンさながらではあるが……。庶民の娯楽のひとつである映画館は八軒もある。日本車がやたらと目につく。六～七割は日本車という感じがする。また、ザンビアではバイクはすべてホンダと呼ばれている。ヤマハ製であれ、スズキ製であれ、すべてホンダである。

さて、私達は早速食糧を調達しに、市内の青空マーケットへ出かけた。日本でさんざん干ばつだ、飢饉だと聞かされていたので、一応の覚悟をして出かけたのだが、肉、野菜、果物ともに、その種類と量の豊富さに圧倒された。ステーキ肉一枚が五百グラム以上という巨大さだ。しかも、値段は一キロ五百円（百グラムではない！）程と信じられないくらい安い。市場の簡易食堂でも、ビーフステーキ定食（シマという、トウモロコシの粉を熱湯で練ってつくる現地の主食と、野菜サラダがつく）が、三百円弱で食べられる。岩塩だけの素朴な味付けで炭火でじっくりと焼き上げられたステーキは、少々固いが、まさにアフリカの味といえるだろう。

野菜も、大根、カブ、オクラ、モヤシをはじめ、日本にあるものは大体手に入る。

米も、アフリカや日本からの援助米（恐らく、超古々米？）が、市場に出まわっていた。日本からの援助米を日本人の隊員が買って食べることには、心理的にややひっかかるものもあったが、制度的には別に問題はないという。派手な色の衣料品やレコードを売っている店もある。はさみ、錠前、鏡、サンダルと、まるでお祭りの夜店を思わせる賑わいだ。一見したかぎりでは、ぜいたく品こそないものの基本的な物資は思っていたほど不足していなかった。ただし、運搬手段の欠如や道路事情の悪さから、物資の流通が上手くいかず、結果として局地的な物不足が生じることもあるし（逆に野積みのまま腐らせてしまうことも度々ある）、一番恵まれているはずの首都のマーケットでの話である。

いよいよ現地訓練に出発!!

何日かが過ぎ、いよいよ現地訓練（ザンビア人の家庭で、一週間ほど生活をともにする）に出発する日が近ずいてきた。

ルサカ朝八時発の長距離バスに乗り、一路東へ約九時間のドライブで、隣国マラウイとの国境の町チパタに着く。道中、どこまでも続くなだらかな起伏の地形と豊かな緑が印象的。はるか彼方に、そして道路ぞいに点在するマッシュルームハウスの集落が、人間の存在を示している。時折、ヒヒの集団が道路を横断しているのが見える。行く先々で、町というのか、村といったらよいのか、まるで大正時代か昭和初期の日本の田舎を思わせる風景が展開する。バス停の近くの道端にどっしりと腰をおろし、バナナやマンゴー、ピーナッツ、ゆでとうもろこしを売っているおばさん達の姿も堂々としていて、まさにアフリカの母という貫禄が伝わってくる。

チパタには幸運にも定刻に着いた。（或る隊員は道中七回のパンクに見舞われ、計三十六時間かかってようやくたどりついたと聞いた）国境の町なら●かし活気があるだろうと勝手な想像をしていたが、建物もまばらなひっそりとした町で、早くもイメージがくずれた。バス停で先輩隊員の出迎えをうける。日本人はその服装で遠くからでもすぐ見わけることが出来る。その晩は農場の中にある先輩隊員の家へ泊めてもらう。日本の2DKの広さで、レンガとコンクリートで作られている。

明朝から、この農場で働く庭師の家、正確には例のマッシュルームハウスで寝泊まりしてもらうと言われ、やや気が重くなる。なにやらダニ、ハエ、蚊が集団で来襲するらしい。バスの疲労も重なり、体中の力がぬけていくようだった。

一晩ぐっすりと寝たら疲れも大分とれ、気力さえ出てきた。「よし！マッシュルームだかオニオンだか知らないが、泊まってやろうじゃないか！」と、ホスト役のテンボ氏の家へ向かう。歩いて五分ほどでそれらしき集落が見えてきた。想像どうりの堂々たるマッシュルームであった。普段は両親の寝室として使用しているが、今回、私のために特別に空けてくれたのだという。家族は、五メートル程離れて建っているレンガ造りのかなり粗末な家に住んでいる。早くも私をとり囲んだ子供達に笑顔をふりまきながら、心●で、これは貴重な体験なんだと何度も自分に言いきかせていた。土間に直接寝るのだろうと覚悟していたが、奥さんが竹のゴザをしいてくれたので内心ホッとする。扉といっても竹で編んだ隙間だらけのものだから、夜中は寒そうだ（実際、とても寒かった）。

テンボ夫妻には六人の子供がいる。全員がローマンカトリックの信者だ。テンボ氏はなかなか愛想のいい男だが、英語は奥さんともども殆んど出来ない。十六才になる長女のエスナットが大分話せたのでとても助かった。

アフリカで食べる故郷の味!?

近所の家々の奥さん連中や子供達が次々と集まってきて、片言の英語や現地語で話しかけてくる。日本人はおろか、外国人がこの村で寝泊まりするのは初めてのことだそうで皆はしゃいでいるが、何だかいい見せ物になっている気がしないでもない。皆の表情や仕草がとても明るい。ふと、「明るい農村」などという言葉が頭にうかび、クスッと笑ってしまう。

丁度、昼食時だったので、初めて「シマ」というザンビアの主食をご馳走になることにする。鏡モチ型のシマにカボチャのツルや野草を干したものを塩味で煮つけたおかずが一皿つく。テンボ氏が、ベジタブルは食べられるかとさきほどからしきりに尋ねていた理由がやっとわかった。このおかずがベジタブルというわけだ。煮沸した水が用意してあるところを見ると、大分気を遣っているようだ。家人と一緒に食べるのかと思っていたのだがどうも違うらしい。薄暗いマッシュルームの中で独りで食べるシマと葉っぱ。何だかとても淋しくて食欲が出て来ない。無理矢理のどに押しこむが、1/4も食べられなかった。

昼食（?）を終えて手紙を書いていると、隣の家の主人が腕時計をもってきて、裏ブタが外れたまま元にもどらないのではめてほしいとのこと。理由を聞くと、時計が故障したので町の修理屋に出したら、故障は直ったものの今度は裏ブタが元にもどらなくなったのだという。信じ難い話しだが、これも日ザ親善の一環と、まるでこの道の専門家でもあるかのような顔で、「よし、やってみよう！」と力強く返事した。筆入れからうやうやしくピンセットを取り出して（とりあえず）アッチコッチ突

っついてみる。最近スウェーデン人から大枚四千円で入手した大切な時計だそうで、相手は真剣である。突然、スポッとはまった。男は大変喜んでお礼に昼めしを食えという。たった今、シマを（いやいや）食べたばかりで気が進まなかったが、それほど誘ってくれるのならとついていったのが間違いのもとで、そのあともう一ヶ所で、計三回シマを食べる破目になった。シマにつくおかずは家庭によって材料・味付けが異なるということが充分わかった。二度目のシマには、少量の油でカリカリに炒めた野草のようなおかずがついていて、油が使われている分だけ香ばしく、うん、いける！という感じ。ただし、シマには一種独得な臭みがあって、いまひとつハシが、いや指がのびない（当然、手ずかみで食事する）。三度目のシマには、カーペンタという日本の煮干に似た川魚の干物の油炒めがついた。もうほとんど食べている真似をしているだけ。やっと終ったと思ったら、カボチャとトウモロコシのデザートが出てきた。結局それも食べてしまったのだから、われながら自分の胃袋にあきれてしまった。

夕食のおかずには感激した。故郷山形の菜っ葉の煮物に瓜二つの味なのだ。正真正銘の日本の味である。日本ではそれほど好物でもなかったのに、アフリカで美味しいと感じる。環境が味覚を変えたのだろう。

満天の星を肴にチブクを酌み交す

電気のない生活は初めての体験だった。太陽が地平線の彼方に沈むと、本当に何もやることがなくなる。貸してくれた手製の小さな石油ランプの炎が弱々しく揺れている。かなり冷え込んできた。ねずみが天井のあたりを騒々しく走りまわっている。ランプの生活は、ロマンチックとも言えるし、みじめにも思える。とにかく彼らにとってはこれが現実である。テンボ氏に頼んで地酒のチブク（トウモロコシで作った濁り酒。酸味が強い）を買ってきてもらい、近所の人々も呼んで、飲みニュケーションをはかることにする。昼の時計の男も昼食のお礼に呼んだ。いつの間にか、呼んだ覚えのない男達もチブクの回し飲みの輪に加わっていたが、その自然な態度には感心させられた。さすがはアフリカだ。どんな病気があるかわからないので、回し飲みは勘弁してもらって、持参の紙コップで乾杯する。ザンビアのこと、日本のこと、ＵＦＯのこと、様々なことを語り合いながらチブクを酌み交す。子供や女達が暗闇からじっと私を見つめている。二時間ほどでチブクも尽きたので、さてお開きということになったが、まだ時刻は八時半。満天の星たちを見上げているうちに、新宿のネオンのまばたきにも見えてきた。あきらめて床に、いやゴザに着く。背中が痛くて夜中に何回も目がさめる。寝る前のテンボ氏の言葉を思い出す。「何も恐がらなくてもいい。自分達がすぐ近くにいる」。この遠い国（一体、日本からはバスで何日くらいかかるのかね？と聞かれた）から来た珍客を気遣ってくれているのがよくわかる。そのお陰か、恐れていたダニや蚊の来襲もなく、第一夜は静かに、いや、いつまでも子供や大人達の話し声や叫び声、それに何やら得体の知れぬ物音や鳴き声が絶えずなかなか寝つけなかったが、とにかく無事にすぎていった。

（次号に続く）

●我が愛しき(!?)マッシュルームハウス

●昼食のシマを用意するテンボ氏の奥さん

●板門店にて

九州MRA協力会

第16回訪韓研修レポート

九州MRA協力会事務局

九州MRA協力会の訪韓研修も、昨年で十六回を数えた。九州電気工事㈱の武富敏幸氏を団長に、㈱岩田屋の池田氏を副団長とする一行十五人は、十月二十日の事前研修に始まり、二十五日に解散するまでの六日間の日程を無事終了した。その様子を簡単にレポートしてみたい。

十月二十日

ソウル金浦空港に昼前に到着した一行は、空港玄関にてMRA韓国本部理事長チョン・ジュン氏らの出迎えを受け、韓国の国花ムクゲの花を胸元に飾ってもらう。昼食後、チョン・ジュン氏の講演「MRAと韓日関係」を聴く。

元国会議員で日本の韓国侵略を厳しく弾劾する立場をとっていた同氏が、いかにして憎しみを捨てて〝日本との過去を忘れることは出来ないが、地球上で一番韓国と親しくなる可能性のある民族は日本ではないか〟と言えるに至ったかの体験と、自身のMRAとの出会いのエピソードを交えながらの興味深い内容であった。丁度問題となっていた藤尾文相の教科書発言の件にもふれ、これが直ちに排日につながることはないと言われた。韓国人には親しい国、親しい友人が必要で、日本は正にそれに相応する国であるとの同氏の心からの呼びかけに、日本は真[illegible]に応えていかなければと感じた。

十月二十一日

第三トンネルと板門店を視察する。かつて一万余人の捕虜の交換がなされ、此の名が冠せられたという「自由の橋」を越えると、いよいよ三十八度線近しと思わせる緊張感が漂よう。第三トンネルとは、七十八年に北側が秘かに堀ったといわれている地下軍事トンネルのことである。日本では体験できない心理的緊張を強いられた板門店視察を終えてソウルに戻る。夜は李博士の講演「韓日平和とMRA運動」を聴く。

十月二十三日

市内観光の後、列車セマウル号で大邱へ、そこからバスで慶州へむかう。出発直前のソウル駅のホームにてチョン・ジュン氏の見送りをうける。慶州は韓国の代表的史蹟都市で一帯は国定公園になっている。七世紀中期迄のいわゆる三国時代のうち新羅が王都を慶州と定め、百済、高句麗を滅ぼした九三五年迄の統一新羅時代を築いた。二十三代法興王が五二七年仏教を国の指導理念としてからその傾倒は著しく、王都を中心に石窟庵、仏国寺、石造天文台など華やかな仏教文化を築いたところという。

十月二十四日

午前中市内観光の後、韓国GNPの十二%を占める巨大企業、現代グループの現代重工業造船所を訪ねる。夕刻、人口三百五十万人の釜山に着く。釜山は日本に一番近い韓国の玄関口で歴史的に日本とのつながりが深い。朝鮮動乱当時、北側の南下に伴い韓半島南部に僅か韓国国土の1/10を残すのみとなった頃、臨時政府が置かれたのもここ釜山である。元々国際貿易港として繁栄した港湾都市であり、現在でも韓国国際貿易のトップとして発展している。街中に入ると八十八年のオリンピックを目指して地下鉄二号線の工事も行われており、人、車、あふれる貨物と如何にも貿易港としての慌しさと古い家並に潮の香が漂う様で港町らしい佇いだ。

十月二十五日

釜山から西へ十キロ、洛東江を渡れば金海空港が真近となる。悪夢の一九五十年の夏、この川を釜山の防衛線とし、最後の決戦が迫った所である。僅か二十七分間のフライトで福岡の板付空港到着。空港にて団長の挨拶があり解散。今回の訪韓研修も無事終了する。

後日、団員諸氏から様々な感想が寄せられたが、以下のように要約してみた。（次ページに続く）

（前ページより続く）

1. 板門店、第三トンネルの視察の機会に恵まれ、九州から海一つ隔てた韓国が、三十五年前想像も出来ない北と南のローラー戦争の渦中で多くの犠牲と韓半島を二分した悲劇に今日も尚、苦悩している姿に、日本の平和と自由を改めて見直すことができた。

2. 近くて遠い国、韓国という意識は日本人が韓国を軽んずる気持を無意識の中に持っている。東洋よりも西洋の価値感に目をむけているということの表れではないのか。日本はもっと東洋的道義を学び、東洋の意識を呼び戻す必要があるのではないか。

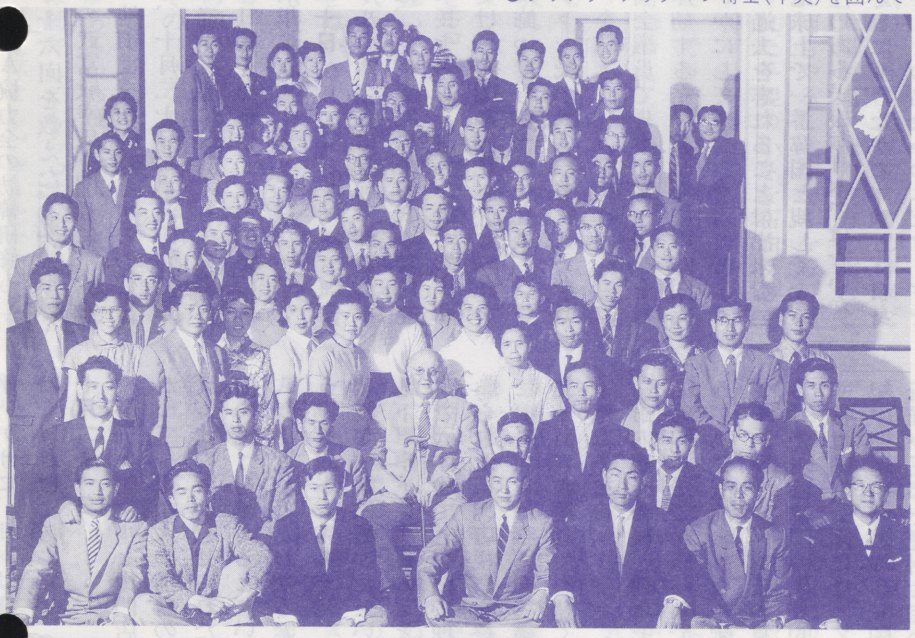
3. 明治以後のギクシャクした関係の中を生き、そして終戦直後は経済的基盤の弱い韓国だったが、今日、動乱をのりこえ日本が百年かかった近代化を二十年にして達成した。朴政権が誕生した六十一年当時の国民一人当りGNP五百ドルが、八十四年に二千ドル、今日二千三百ドルと五倍にも飛躍した。

この発展を導いた国民の勤勉性と目的達成にかける根性にすさまじいバイタリティーとエネルギーを感じた。

写真で見る MRAの歴史 No.4

青年団一〇〇人マキノ島に招かれる（昭和三十二年）

●フランク・ブックマン博士（中央）を囲んで



昭和三十二年六月、米ミシガン州マキノ島で開かれた第十一回MRA国際会議に全国の青年団幹部一〇〇人が招かれた。これほど多数の日本青年が一度に国際会議に招かれたのは戦後はじめてのことであった。大会へは世界中から青年を中心に約二千人が参加し、国際紛争の舞台となっているアジア、アフリカ地域の緊張を青年の共同生活と話合いを通じてときほぐそうと活発な論議が交された。

事務局近況

●相馬雪香さんの自叙伝「心に懸ける橋」（定価一五〇〇円 世論時報社）の出版記念会が、去る三月十一日に憲政記念館で盛大に行なわれました。田村通産大臣を初め大勢の超党派国会議員や財界人、そしてMRA関係者等三百余名の方々が参加され、相馬さんの多彩な交友の一端が窺えました。チベットのダライラマ猊下や民主カンボジア連合政府のソンサン首相からの祝電が披露されたり、この会のためにわざわざ来日された日韓女性親善協会の朴貞子会長が祝辞を述べるなど国際色豊かな二時間でした。本の売れ行きも好調の様子で、MRA事務局も沢山の方々からのご注文を頂いております。著者のサイン入り本をご希望の方はなるべく早めに事務局までお申込み下さい。

●しばらくお休みをした留学生との交流会を三月より再開しました。今回は台湾の黄弘謙さんをゲストにお迎えしました。毎月第三日曜日に千駄木のMRAハウスで開かれるこの会に是非ご参加下さい。お問い合せは事務局の長野にお願します。

日米欧財界人円卓会議日本キャンペーン参加者歓迎レセプションのご案内

第二回日米欧財界人円卓会議（八月・コーの準備をかねて、フィリップス（蘭）、ジスカールデスタン（仏）氏を初め十名の欧米経済人が来日し、通産省、経団連などと交流をされます。

この一行を囲む歓迎レセプションを左記の通り開催致しますので、是非ご参加下さい。

記

一、日時　五月八日㈮午後六時より

一、場所　経団連会館十階ルビールーム
東京都千代田区大手町一-九-四
（Tel）（03）二七九-一四一一

一、会費　一万五千円（申し込みは事務局まで）